

須恵器生産のはじまり

The Beginning of the Sue Ware Production

酒井清治

はじめに

①倭における須恵器生産開始期の窯跡

②須恵器の系譜

③器形と技法の特色から見た須恵器の「日本化」について

④倭における平底坏の系譜とその問題点

⑤須恵器生産開始の目的

⑥須恵器の年代

⑦倭国と朝鮮半島三国

おわりに



倭に須恵器が伝わったのはいつで、どこからか、またその須恵器はなぜ導入されたのか、土器生産を通して倭と朝鮮半島の交流を探ることを目的とした。

構造窯を使った土器生産が伝わったのを、時期あるいは地域を考慮して段階設定して1段階、2a段階、2b段階とした。1段階は百済地域から瓦質土器生産技術が、2a段階はおもに加耶地域から陶質土器生産技術が、2b段階はおもに百済・栄山江流域地域から陶質土器生産技術が伝わったと考えた。1段階の出合窯跡の土器は瓦質でそれも日常什器で渡来人のために生産した窯と考え、のちの陶質土器生産と目的が違うと想定した。2a段階の大庭寺窯跡には平底坏が出土し、その系譜が問題であった。これについては百済・栄山江流域に分布する平底坏の系譜を引くと考え、越も含め、2a段階の加耶系の中にもわずかながらすでに百済系・栄山江流域系が含まれるとした。それは加耶系にない坏と越を選択して取り入れたからとした。

倭の須恵器生産導入の目的は、2a段階の窯の器種構成を見ると大甕が主体でその後も長く作られていくが、器台はすぐに激減し、越、続いて坏が順次増加していく。同時期の古墳の器種構成を見ると大甕が見られない。大甕の生産目的は大型倉庫と関連する貯蔵器種として製作されたとした。器台は供献具であるがすぐに激減する。それに対して越が取り入れられ早く定型化し、祭祀具等に使用されていった。しかし坏は供膳具としての性格が強く、その点で採用が遅れ定型化も遅れたと考え導入器種の選択があったとした。

須恵器の生産開始年代について陶質土器との並行関係や年代の分かる資料、埼玉古墳群等の検討から持ノ木古墳の時期で5世紀初頭とした。その理由として朝鮮半島の高句麗南進に対抗して倭が百済・加耶と同盟関係にあったこととした。